
犯人は一行目に

冬雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犯人は一行目に

【Zコード】

Z2893B

【作者名】

冬雪

【あらすじ】

犯人が一行目にいる、という前人未到の境地に挑む犯人当てミステリー。まずは何も言わずに読んでみて、騙されたと思ったら拍手を、騙されなかつたら失笑を。そんな感じの話です。

「 犯人は、彼女だ」

ここは、千城ヶ崎高等学校の図書室。外界から切り離されているのかのような静寂に満ちた空間の中に、年季を感じさせるものから新書のものまで、所狭しと本が秩序だつて並べられている。

この図書室は、大まかに、生徒たちが読書に耽つたり自主学習に励んだりする閲覧室と、司書教諭や図書委員などが作業を行う司書室の二つに分けられる。彼らがいるのは後者の方だ。

そこには、使い込まれたせいか、ややクッショーンの抜けたこげ茶色の椅子が三つ、各大学の最新の赤本、そして何故かカンガルーのぬいぐるみやコーヒーメーカー、果ては冷蔵庫なんでものまである。ぱっと目につくものはそれくらいだが、探せばまだまだ出てきそうな気配である。

「よお、くつちー。こんな所で会うなんて奇遇だな

来客を手を上げて迎えた、制服をラフに着こなす男子生徒の名前は芝村綺士。彼の屈託のない笑顔はとても幼く見えるが、これでもれつきとした高校二年生、付け加えるならば図書委員でもある。

「フン。呼び出したのはお前だろう、綺士」

対して、愛想笑いも返さずに芝村の向かい側にある席に座ったのは、朽木玲人同じく一年。彫りの深い顔立ちと、年相応とは言いがたい重々しい威圧感が相まって、下級生と言わず上級生からも一目置かれる存在である。ちなみにこちらは保健委員長。

「ん、そうだっけか？」

「ああ。……用件が無いのなら、早々に退出させて貰おう。俺はこ

れでも多忙の身でな」

有無を言わせぬ朽木の威儀を、芝村はせりつと受け流す。

「まーまあ、んな焦るなつて。ちょっとしたアジアンジヨークじやん」

「……なんだそれは」

「んで、コレよコレ」

呆れる朽木の田の前に、乱暴に放り投げられる十枚ほど紙の束。

「……」

それを渋々といった感じで受け取った朽木は、しばし無言で内容を流し読みしていたが、

「……ふむ。一つ聞くが、これは実際に起きた出来事か?」

「うむ。……あ、いやこっちの世界ではそななんだけど、この番組はフィクションで実際の人物・場所・団体名とは一切関係がないのであしからず」

「……誰かを混乱させるような発言は慎め、綺士」

「つむ、スマン。んでそーそー、これは実際にあつた話よ」

芝村は満足そうに頷く。

「……はて。この学校に留学生がいるといつ話は見た覚えも聞いた覚えも無いが?」

「ん? ……ああ、カレマ アリスさんのコトか。そりやあれだ、単に漢字を忘れただけだから気にせんといで」

「…………まあ、いい。それで? 何故このよつな代物を俺に見せた?」

朽木はパンパン、と紙束 芝村が書いた(らしい)小説を叩いた。

「つむ。つまり、だ朽木君。チミにコレを解いてほしいのだ、まる」

「まる?」

「いや、特に意味はない」

……さて。前置きは「れぐらにして、そろそろ本編

村の書いた小説を」ご覧いただこう。

中身は単なる日常の一コマ。そこに不思議など何もなく、欠伸が
出るような話の筈なのだが『読み方によつて』は、ミステリ
ーとそれなくもない。そんな話である。

では……

×月 日、曜日。芝村綺士は、特に目的もなく校内を歩いていた。ぼんやりと取り留めのないことを考えつつ、職員室の前にある階段を降りる。すると、

「あ、芝村せんぱい」「んにちはー」

「あら、キシジじゃない」

「御機嫌よう、芝村君」

一・二年入り混じつた謎の女子団十数名と出くわした。芝村はその性格から女子に大いに好かれる傾向にある。他の男子なりござ
しらず、彼にしてみれば学校はまさにパラダイスなのだ。

「……綺士。そろそろ破り捨ててもいいか？」

「やや、そこはほんのジョークだから軽く流して先に進むべし」

数分ほど適当に雑談をし、芝村は図書室に入った。何人かの女子

も図書室に用事があつたようで、彼に続いて入る。

入つてすぐの場所にある、図書委員が本の貸し借りを受け付ける

場所に座つたのは、一年女子、葉月茂花。

「あれ、葉月ちゃんて図書委員だっけか？」

「いえ、保健委員なんですけど……茅さんに……」

どうやら、図書委員の友達に当番を代わつてもうつよつに頼まれ、断りきれず引き受けてしまつたらしい。まあ、そこがこの子の押しの弱い……もとい心優しい、いい所なのだ、と芝村は一人で勝手に満足し、うんうんと頷いた。

「……ふうん。玲はいない、か」

ぞつと辺りを見渡し、玲……つまり朽木がいないことに落胆した長髪の女子は一年、如月唯。演劇部に所属している彼女は、高校生らしからぬ妖艶とさえ形容できる大人っぽい美しさで一部男子のハートをがつちりと驚掴みにしている。ちなみに朽木とは幼馴染とうべタな関係だ。芝村からすれば羨ましいことこの上ないのだが、当の朽木はそれを鬱陶しがつている節さえある。全くもつてけしからん。

「…………」

「ビリビリビリ。芝村が三日かけて書いたそこそこ手抜きの小説が、真つ二つに割れていぐ。

「だーつ、ちょ、タンマタンマー、悪かつた、いや俺が悪かつたから頼むからそれだけはお代官様 つ！」

「…………そもそも、これを読んだ俺の反応を読めぬお前でもあるまい。何故わざわざ人を怒らせるような真似をする？」

「ん……面白いから」ビリビリビリビリッ！

「ぎや——————つす——！」

「ふう。やつぱり、ijiの雰囲気はいいわね。なんていうか、落ち着くわ」

静かに本を読みふける葉月を見ながら、二人は司書室に入った。芝村はともかく、彼女はこちら側に入るのは一、三回目なので、まるで未開の地に初めて足を踏み入れた冒険家のように日を輝かせ……とまではいかないが、それなりに興味深げに内装を観察している。もつとも、閲覧室と司書室を隔ててているのは透明な窓だけなので（しかし今はそれも開いているので、例えば中と外で物を受け渡しすることも出来る）、外からでも中を覗くことは出来るのだが。

と、芝村はこそそと司書教諭（今日はまだ姿が見えない）がいつも座っている席を通り抜け、その奥へと向かう。

実は、司書室の裏には、外からは見えないがちょっととしたスペースが存在する。そこには、使い込まれたせいかややクツショーンの抜けたこげ茶色の椅子が三つ、各大学の最新の赤本、そして何故かカングルーのぬいぐるみやコーヒーメーカー、果ては冷蔵庫まで置いてある始末だ。

「ねえキシ、これなんて読むの？」

「うおっ！……？」

いつの間にか回り込んだのか、すぐ後ろから質問され、芝村は驚いて振り返る。彼女の視線の先には、達筆な文字で『海女』と書かれている色紙があった。

「ん……こりや『あま』って読むのだ」

「フーン。キシって物知りなのね。意外と」

「そーでもないさ。つーかチミは読めなきやダメっしょ。名前的にむー、とふくれて司書室の表側に戻つていく彼女をよそに、芝村は慣れた手つきで「一ヒーを淹れ始める。

「あ、私にも頂戴ね」

背後から如月の声。どうやら匂いで気づいたらしく。

「へいへい」

「コーヒーが出来上がるまでには、少し時間がかかる。暇を持て余した芝村は、なんとはなしに冷蔵庫のドアを開けてみる。と、中にはミカンとクリームを挟んだパンが一つ。確か購買にこんなメニューーあつたなーと綺士は思い出し（彼の昼食は主に弁当である。しかも女子の手作りである場合が多い）、「……ふむ」

食べ盛りの高校二年生、芝村の目がキラリと周囲を警戒、誰も見ていないことを確認する。

「んじやまあ、いただきまー……」

「あ、綺士？」

口を開いて今までにパンを食わんとする寸前で、如月の声が彼を止めた。

「ん、な、なんじやーい？」

慌ててパンを元の位置に戻し、司書室の裏側から顔を出す。

「そこのパン、私のなのよね。あなたなら勿論そんなことしないでしちゃけど……食べたら、ヒドいわよ？」

「は、はは、まさかそんなコトする訳ないじゃないですか。俺は基本的に一人前が好きなんでねあつはつはつは……」

芝村は、よくわからない言い訳をしながら無理矢理笑顔を捻り出しだが、少し……いや、明らかに不自然だつた。ちなみに、如月の位置から彼が何をやつていてるかは見えない筈なのだが……恐るべき女のカン、といった所か。

成り行き上、三人分のコーヒーを淹れる羽田になつた芝村は、紙コップの一つを、手を伸ばしてきた如月に渡し、もう一つを表側の司書室にあるテーブルに置いた。

彼女が美味しそうにコーヒーをするのを横目に、芝村もしづかしコーヒー ブレイクと洒落込む。

そうしてしばらく時が流れ、芝村が一杯目の「コーヒー」を飲み終えた頃。

「……ねえ。あなた、どう思う？ アリスのこと」

悪戯っぽい笑顔を近づけて、如月が突然質問してきた。

「ん……」

芝村は、彼女 如月がアリスと呼んだ女子と、初めて会った時のことを思い出し、……握手を求めて手を伸ばした一秒後、みつともなく地面に転がっていた自分も思い出した。……まあ、誰だつて握手しようつと差し出した腕の関節を極められて投げられるとは思わないだろ？。

「……悪い子じゃない、とは思つ。んだが、俺の守備範囲とはちょっとズレとるかね」

わざとらしく肩を竦め、芝村は如月から空の紙コップを受け取った。

「ふうん。……私ちょっと行ってくるから、よろしくね」

「ん、どこへ？」

「……あなたはもう少しテリカシーって言葉を理解してくれればね。ま、どちらにせよ玲には敵わないけど」

「ふむ。なんだか知らんが、とりあえずいつてらっしゃい」

如月が図書室から出るのを見送つて数秒後、

「む……いかん、トイレに行きたい」

芝村は、唐突に尿意に襲われ、慌てて図書室から少し離れたトイレと向かった。

雑に手を洗い、一分もかからず芝村は図書室に戻ってきた。如月の姿はまだ見えず、利用する生徒もいないのにかいがいしく受付を務めていた葉月が控えめに微笑んで迎えてくれた。

と、

「あら、帰るの？」

やや湿った手を赤紫色のハンカチで拭きながら、（恐らくお手洗い

に行つていたんだろう) 如月が帰つてきた。

「いや、俺もトイレ行つてただけ。……つつつとも、もひこんな時間か」

時刻は既に六時少し前。そろそろ図書室が閉められる時間である。

「んじや、帰りまつか?」

「あ、待つて。私のパンを回収しておくれ。折角帰り道で歩きながら食べようと思つてたんだから」

「……(ボソッ) 相変わらずいい趣味してゐなあ、唯ちゃんてば」

「何か言つた?」

「いや別に何も」

如月は数秒彼をじつと見つめいでいたが、結局何も言わず図書室裏の冷蔵庫へと向かつた。

「そ、それじや、私もそろそろ帰りますねー」

俺たちのやり取りの一部始終を見ていた葉月が、妙に慌てて立ち上がる。

「? なんでそんな焦つてんの? ……あれ、そういうや彼女はど

「い、いえ! 別にその私、何も隠してませ」

ズドードードオオオオオオオーン! ! !

「「つ! ! ?」」

爆音の発生源は司書室裏。如月が向かつた先である。

「どどど、どしたつ! ?」

芝村が辿り着いたそこには 鬼が、いた。

「……ねえ、綺士。あなたは、私のパンを見たわよね?」

「一ツ「ひとつと、これ以上ないくらい完璧な笑みを浮かべて、如月は彼に問い合わせる。不穏な空気など一%もない筈なのに、……何故、こんなにも呼吸が苦しいのか。

「あ、ああ。確かに、見たぜ」

……この時点で、芝村は如月が何を言わんとしているのか理解する。が、それは同時に自分がここから生きて帰れそうもないことを意味していた。

「 それが、無いの。……ふふふふふ、綺士？」
「 は、はいなんでしょう?」

「 私、言ったわよね? 食べたら、ヒドい、って
ゆうり、と如月……いや、鬼神が一歩歩み寄る。さながら死への
カウンントダム。ふと見ると、如月の後ろにある冷蔵庫が拳の形に凹
んでおり、芝村はああ、俺もあんな感じになるのかなあ……、と遠
い目をしかけて慌てて立ち直り、なんとか説得を試みる。

「 や、待て待て。俺は食つてない……って言つたら、信じてくれる
か?」

「 ええ、信じるわ。どちらにせよ、田口ひついた人間を片つ端から倒
して行けば犯人に突き当たるんだもの。あなたが有罪でも無罪でも
関係ないわ」

「 ちよ、それヒド過ぎだろ? ひきつけ……つす……」

「 ……よくぞ生還してくれた、綺士」

「 いや……あの時はマジで死んだと思つたぜ」

「 なははは、と苦笑にする芝村の表情はどこか弱弱しい。

「 ……はて。これを解けとこことは、つまり購買のパンを食べた
輩を指名しろ、といふことか?」

「 うむ。もつとも、犯人はもうとつて捕まつて唯ちゃんの鉄槌を
受けたけどな」

「 ……なんだ。ならば俺がいちいち考える必要は無いではないか
つまらん、とばかりに朽木は原稿を芝村に突き返した。

「 まーそーゆうなつて。折角だから当ててくれよ

「 お前か葉月か如月。以上だ」

「 正解だろ? と勝ち誇つて席を立つ朽木。……しかし、

「いや。残念ながら不正解さ、くつちー君」

「くつくつく、と今度は芝村が勝ち誇るように怪しげな笑みを漏らした。

「……ほう。では大方文中に存在しない、ないし台詞の中にしか登場しなかつた脇役の輩が犯人か」

「やーーー。そんなコトしたらミステリー的にアレじゃんか」

「……初耳だ。この駄文は、ミステリーに分類されるものだつたのか」

「うむ、一応な。つーかぶつちやけると、犯人は、『芝村綺士が書いた小説の中に苗字も名前も登場した人物の内の一人』だ。あ、くつちーには言つまでもないだろうけど、この芝村綺士と朽木玲人との会話は、『芝村綺士が書いた小説』には含まれないぜ」

「? 何を当然のことを

「ま、誰かのための説明つーことで」

「……」

朽木は、眉根を寄せて芝村の小説を読み直す。

ざつと見たところ、彼の小説の中でフルネームが記載されているのは芝村綺士、如月唯、葉月茂花の三人のみ。しかしこのいすれかが犯人である可能性は、つい先ほど作者自身が否定した（その言葉を疑うなら話は別だが……この場合、そうしていては話が進まないので思考から割愛する）。

ならば、犯人は誰か？ そもそも、読んだ限りでは司書室に入ったのは芝村と如月だけではなかつたか？ では、やはり芝村が犯人なのか？

「えー、どうよ？」

「…………ふむ」

朽木は、迷走しかけていた思考を回復させるべく、一度ゆっくりと深呼吸して首をぐるりと回す。そこで あることに、気づいた。

「……綺士。今一度尋ねるが、この話は現実の場所で現実に起つたことを、現実のまま書いたものだな？」

「ん、まあ多少俺の主觀が入ってる感は否めないけどな。まあ、変える必要のないところを無駄に変えたりはしてないつもりだぜ」

「成る程。理解した」

朽木は、今度こそ勝利を確信して微笑んだ。

問題編（後書き）

以上、問題編でした。

次回、解決編です。トリックとしてはどうなんだー、と憤る方がいらっしゃるかも知れませんが、そこはほら、空想ですから、「こんな があつてもいいか」、と寛大な心で受け止めて頂けると幸いです。いえ、パンが一人でに飛びでいったとか、そんな反則ではさすがにありませんが（笑）

「成る程。理解した」
朽木は、今度こそ勝利を確信して微笑んだ。

そうして出した結論が、

「犯人は、彼女だ」

冒頭のセリフだった。

「…………ひゅう

芝村は、さすがにそこまで『ズバリ言い当たられる』とは思つていなかつたので、動搖を隠し切れず、口笛に軽く失敗した。

「当然の帰結だ」

対して、朽木はククク、と悪魔のよつに あるいは子供のよつに 、彼のうるたえる様を愉快そうに眺めている。

「…………やれやれ。ちょいと親切すぎたか

「何、お前の悪戯いたずらにしては存外に楽しめた。次があるのなら、それなりに楽しみにしてやる」

「ちえ。せっかく、『あの口俺と一緒に図書室に入った女子』を呼んでおいたつてのに、面白を半減じゃん

「ほづ

「そういうや、そろそろ来るはずなんだが……」

芝村が図書室の裏側から顔を出すと、ちょうど一人の長髪の女子が図書室のドアを開けてこむらこむらと入ってきた。ひうだつた。

「おー、久しぶり。あの時以来だつけ?」

「ええ。お久しぶり、キシ

長髪の女子は、スカートの裾をひょいとつまみ、貴族めいた優雅さで一礼した。

「それで？ 彼は、ここに？」

「つむ」

長髪の女子は、閲覧室と司書室とを隔てる銀色のドアを静かに開き 杷木は、目を丸くした。

そして、『あの口芝村と一緒に司書室に入った女子』は、言つた。

「初めまして、レイジ。自己紹介が必要かしら？」

「いや、必要無い。存外に天からの寵愛を受けた容姿だった故、見惚れただけだ」

「あら。そんなこと言つたら、コイに叱られるわよ？」

「知つた事か。……ああすまん、まだこちらが名乗つていなかつたな。お初にお目にかかる、

彼女、アリス

「

そう。アリスと呼ばれた女子の本名は、『彼女アリス（かれま ありす）』。諸事情によりアリスという名前はこのままカタカナで表記するが、この場合問題なのは苗字の方だ。

この事実を念頭に、もう一度芝村の小説を読み返してみると、彼の小説の中に登場する『彼女』という単語を、全て『カレマ』と読み替えた時、様々な違和感がたちどころに氷解する……筈である。

「……ホント、出来心だったのにヒドい目にあつたわ。まさかコイ

があそこまでケチだつたなんて、ね

「いや、俺の調査によると、どうも誰もがんばる自分のものを奪わ
れるのがどうにも我慢ならん性格のこ。やまとひだりの野口へ。

解説のべつちー君

「何故やひで俺に話を振る?」

起きたのは、他愛もない日常の一コマ。友人のおやつを、ち
よつと田を離した隙につまみ食いし、後輩に口止めをして逃走した、
ただそれだけの話だ。だが、少し『読み方を変えてみる』だけで、
いつも違つて見えるものか、と。あなたがそう思つてくれたのなら、
この話はその役割を果たしたと言えるだらう。

では、彼らの平凡にして愉快な日々はこれからも近づいていくが、
今回はこれくらいで幕を閉じたいと思つ。…………願わくば、またいつ
かどこかでお会いできる機会がありますよう

解答編（後書き）

以上、解答編でした。つてうわあ、物を投げないでー。（何一応蛇足しておきますと、問題編最後で朽木が気づいたのは、実際の司書室の裏側には『海女』なんて色紙が置いてない、ということです。我ながらかなり苦しい気もしますが、これも『彼女』という苗字を導くためのヒントということです、はい。後、唯とアリスでは芝村の呼び方が微妙に違つたり。

とまあ、そんな感じの結末ですが、ここまで読んで下さった方、ありがとうございました！ よろしければ、時間のある時にでも、文句や文句や指摘や感想など頂けると幸いです。（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2893b/>

犯人は一行目に

2010年10月13日04時20分発行